

# ニューヨークの空中庭園ハイライン

黒沢 眞里子\*

はじめに

ニューヨークの人気観光名所といえば、自由の女神、セントラル・パーク、メトロポリタン美術館、ブルックリン・ブリッジ、最近では911メモリアルミュージアムなどあげられるが、さらに近頃、空中庭園ハイラインが加わった。「空中庭園」という魅力的な響きに誘われ大勢の人々が訪れている。これは、廃線となった高架鉄道「ハイライン」を再利用して作られた全2.3キロメートルの空中庭園遊歩道である(写真1)。第一区画が2009年、第二区画が2011年、最後の第三区画が2013年にオープンした。ロウアーマンハッタンのみートパッケージ地区のガンズヴォート・ストリート(14丁目)から始まり、ハドソン川沿いにウェストサイド・ヤード(34丁目)まで続く。

2011年に長期在外研究でマンハッタンに滞在していた筆者も、第二区画がオープンした直後ハイラインを訪れている。階段を上ると、緑の異空間が広がり、歩みを進めるとレールを利用した可動式の木製ベンチや水辺もあり、所々に道路を見下ろす階段状のベンチが設けられ、人々はガラスのフレーム越しにまるで劇でも観るのようにゆったりと下の景色を楽しんでいた。その斬新なアイデアと洗練されたデザインに筆者は圧倒された。

---

\*専修大学文学部教授



写真1 写真中央を走るハイライン。その先にはハドソン川と自由の女神を臨む。Photo: Iwan Baan

ハイラインは、もともと、1934年に産業用物資を運ぶため貨物輸送路としてマンハッタン最大の工業地区、ロウアーウエストサイドに建設されたものが、工業地区の衰退とともに1982年に廃線となった。それからほぼ20年間、放置された高架線路上には雑草が生い茂り、灌木すら生え、メガロポリスの異空間“wilderness”（原生自然）が形成された。地上約4メートル（2階から3階の高さ）の高所にあったため、人知れず独自の世界を形成し続けた。そのハイラインの、メガロポリスでこそ意味ある未曾有の価値が「発見」されたというわけだ。その価値に魅了された市民による廃線撤廃反対運動、再利用の試みが空中庭園を誕生させ、大成功を収めて一躍世界の注目を集める都市再開発プロジェクトとなった。

その人気ぶりは、2009年のオープン時の年間訪問者数130万人が当初の予想30万を大きく上回り、さらには6年後の2015年には760万人と6倍にも増えたことからもうかがえる<sup>1</sup>。これらの訪問者のうち、28%は海外からの旅行者で、ニューヨークの試みは海を越えて海外にも影響を与え、2017年には韓国ソウルに同じような高架緑地ソウル・スカイガーデン、「Seoulo 7017」を誕生させている。

## 先行研究と関連書籍

ハイラインの成功は、現役を退いた歴史的建造物を資源として再利用する都市再生事業の成功例として海外からも注目され、学術的研究もなされている。それが高架鉄道であるために、複雑な利害集団が絡み、一筋縄では行かない保存活動が市民主導によってなぜ成功できたのか、そのプロセスを明らかにする研究が日本でも行われ<sup>2</sup>、最近では植栽の特徴に注目した論文も書かれている<sup>3</sup>。

ハイラインのオープンから10年経過し、世界から注目されるプロジェクトについての主要出版物も出揃った感がある。*High Line: The Inside Story*

*of New York City's Park in the Sky* (2011), *The High Line: Foreseen. Unforeseen* (2015), および *Gardens of the High Line: Elevating the Nature of Modern Landscapes* (2017) は、それぞれ、市民団体結成からハイライン実現までの詳細な経緯、全体デザインで重視されたこと、植栽デザインでの新たな試みについて書かれ、ハイラインの成功の「秘密」を探る上で重要な、運動の経緯、デザイン、植栽の側面をこの3冊がカバーしている。

最初に出版された *High Line: The Inside Story of New York City's Park in the Sky* は、ハイライン保存運動を主導し、後に非営利市民団体 Friends of High Line を立ち上げたジョシュア・デイヴィッドとロバート・ハモンドが、彼らの出会いから完成後までの経緯を二人の対話形式で綴ったものである。団体の命名から、広報活動と資金集め、市や州、国との折衝や裁判など、詳細に、しかし対話形式なので軽い語り口で、二人の視点が交差しながら興味深くそのプロセスが語られている。その2年後には翻訳も出版され、日本での関心の高さもうかがえる（和田美樹訳『HIGH LINE アート、市民、ボランティアが立ち上がるニューヨーク流都市再生の物語』、2013年）。これを読むと、廃線の公園化運動がいかに困難な状況下で継続され、いくつかの社会環境変化にも助けられながら（それには破壊への嫌悪感を生んだ9・11事件の悲劇もあった）、最後には市民主導で大プロジェクトが実現した経緯がよく理解できる。

さらに、2015年には、ハイラインを成功に導いたもう一つの大きな要因である遊歩道の斬新で洗練されたデザインを手がけたジェイムズ・コーナー・フィールド・オペレーションズ&デイラー・スコフィディオ+レンフロによる *The High Line: Foreseen. Unforeseen* が出版された。ハイラインで使われたコンクリートの特徴的モチーフがそのまま表紙となり、まさにコンクリートの塊そのものといった重量感のある分厚い本には、このプロジェクトのデザインに関わった主要人物たちへのインタビュー形式で、そのデザイン・コンセプトや施工方法などが写真や図とともに詳しく解説さ

れている。

2017年には植栽デザインを主導したオランダの造園設計家ピート・オウドルフ他による *Gardens of the High Line: Elevating the Nature of Modern Landscapes* が出版された。オウドルフは、昨今注目を集めているニューベレニアル運動（新・宿根草運動）と呼ばれる、自然主義的で持続可能な庭造りを主導するオランダ人造園設計家である。この分野ではすでによく知られていたが、ハイラインの成功によって一躍世界の著名人となった。この本には、先に述べたハイライン実現の功労者の一人、ハモンドの序が入っており、植栽デザインの本質が端的に語られている。

## 研究の目的

本論は、これまで出版されたこれらハイラインの論文・書籍に加え、『ニューヨーク・タイムズ』紙を中心とする新聞記事や、ネット上の記事を使用し、ハイラインの本質を多角的に考察するものである。というのも、ハイラインの価値、その成功を真に理解するためには、都市再生プロジェクトの実践的プロセスを解明するだけでは十分でなく、ニューヨークの歴史や文化、世界のメガロポリスとしてのユニークな都市特性や、さらには公園・造園史に照らした多角的なアプローチを必要とするからだ。デイヴィッドやハモンドらも述べているようにハイラインの成功をそのまま他の都市、国に応用するのが難しい所以でもある。

ハイラインがいかに語られているか、本論ではニューヨークの都市や公園、欧米の造園史の文脈に照らしながら考えていく。特に、イギリスの風景庭園や筆者の研究分野である19世紀アメリカの田園墓地から引き継がれた考え方を明らかにし、それが現代の都市環境の中でいかに再登場しているか考察する。

## 「発見」された大都市の「巨大空間」と「原生自然」

ハイラインの魅力はどのように語られているのだろうか。ハイライン保存運動を起こしたハモンドが最初にハイラインを意識したのは、1999年8月15日、『ニューヨーク・タイムズ』紙で市がハイラインを撤去しようとしている記事を読んだ時だった<sup>4</sup>。2.3キロメートルにわたる高架鉄道がマンハッタンを22ブロックも途切れずに縦断している。都市に隠された「巨大スペース」に彼は気づいた。「隠されているものは普通小さい。小さいから隠れている。でもこの隠れた場所は巨大だ」とハモンドは述懐している。

確かに、「発見」という言葉はハイラインを語るときの一つの鍵言葉となっている。雑草生い茂るハイラインを撮影して一気に注目を集めた写真家ジョエル・スターンフェルドの写真集 *Walking the High Line* に寄稿した歴史家・写真家ジョン・スティルゴーは、15ページにわたって「発見」をテーマにハイラインを語っている。「ここを注意深く発見せよ。…都市の自伝は発見から始まる」という書き出しで、コロンブスの「発見」——1990年代になって教育者を突然まごつかせた「発見」——から始まり、ソロー、ホーソーン、ジェイムズ、エリオット、フロストなどの作家・詩人の「発見」の意味と鉄道の歴史が綴られている。乗客を乗せることもなく、線路を横切る人もなく、アクセスする手段もなく、それでも通りからはっきりと見えるのに、人がじっくり観察する機会もなく、見慣れた景色 (plain view) から隠された謎としての存在、それがハイラインであると締めくくっている。セントラル・パークよりも高所にあつて人の管理から逃れたハイラインには、写真のイメージが力強く訴えているように、メドゥ（草原）、茂み、灌木が季節によって移ろう姿があつた。「そこにある」ことを人々は知っていたのに、禁じられた空中の原生自然は発見されずにいた。「そ

ういうわけで、ここを注意深く発見せよ。…見慣れた景色に隠されたものを発見せよ」<sup>5</sup>というのがスティルゴアのメッセージである。彼の文章は、後に続く『ニューヨーカー』誌のスタッフ・ライター、アダム・ゴブニックによる、短い、卓越した文章に押され気味で、冗長な印象を与えるが、発見と鉄道の歴史の中にハイラインを位置付けているスティルゴアは、「廃墟」としてのハイラインの核心をよく見抜いている。

スターンフェルドの写真はもともと『ニューヨーカー』誌にゴブニックの記事とともに掲載されたものだ。野草の生い茂るハイラインの姿を捉えたスターンフェルドの芸術的写真は、たちまちのうちにニューヨーカーの心を掴んだ。写真と記事は、人々にハイラインのイメージとそれを語る言葉を与え、その後のハイライン保存運動を大きく前進させる力となった。彼のハイラインの写真は、100年以上も前にイエローストーンを初めて写真に納めたウィリアム・ヘンリー・ジャクソンが国立公園運動に与えたインパクトにも例えられている<sup>6</sup>。

ハイラインが20年以上も手つかずの「未開の原生自然」として残っていた事実は、不動産や開発業者の手垢がつけられていない土地はほぼ皆無というマンハッタンではきわめて稀なことだった<sup>7</sup>。

開拓時代を経て広大な原生自然が急速に失われる中、自然の野性を都市の中に取り込む試みこそ、アメリカの都市公園の歴史であったことを考えると、ハイラインも、その系譜に繋がることは間違いない。

## 「高所」が意味すること

ハイラインを「発見」する視点は、ニューヨークの街を再発見する視点にもつながっている。写真撮影に同行して、整備前のハイラインに初めて登ったハモンドも、高所に広がる原生風景を見て、ニューヨークを全く別の視点で眺める経験をしたと語っている<sup>8</sup>。建築評論家ニコライ・ウルソ

フも、公園となったハイラインを歩き、意外な発見だったのは、ニューヨークという都市の見方が一変したことだと述べている。その遊歩道を、川を臨む「狭く深い都市の谷」(narrow urban canyons)に見立て、それはマンハッタンの他の地区とまったく新しい視覚的繋がりを作り出している<sup>9</sup>。まさに、高所から眺めると、見慣れたマンハッタンが退いて新鮮な姿が立ち現れてくるというわけだ(この記事のタイトルは、「高所ハイラインからの新鮮な眺め」“On High, a Fresh Outlook”)。

ゴブニックの詩的な書き出し、「ベニスといえば水であり、ニューヨークといえば高さだ」にあるように、ハイラインの魅力はその「高さ」であることは間違いない。日々、閉塞したオフィスで働くニューヨーカーたちは、ちょっとした微風、あるいは風変わりな景色を求めて、もっと高く高くと高所を求める。それは日常からの逃避であるばかりか、同じ体験をすることがニューヨークならではの帰属意識さえ育んでいるという。というのも、下を見下ろすことは通常さげすむ行為であるが、マンハッタンでは高層ビルから下を見下ろす行為は、ある種共同体験(communal experience)となっているからだ<sup>10</sup>。しかも、上空からの視点は、ニューヨークにおいては、「崇高」(the sublime)というより「美しい」(the beautiful)眺めであり、奇妙にも平和でノスタルジックな眺望であると述べている。これはもちろん、18世紀の思想家エドマンド・パークの「崇高」と「美」を念頭に置いた意見だが、ゴブニックは続けて、「崇高」は、空中ではなく、むしろ地下にあり、例えば、6系統の地下鉄が、暗がりの中を、燃え盛る炎の目をもって14丁目に近づいてくる姿ではないかという。

しかし、ハイラインの場合、その高さが、高過ぎないことも重要だ。ほぼ、建物の、2階から3階の高さが、マンハッタンの見方を一変させるに十分である一方、下の通りとの繋がりを失わない程よい高さにとどまっている。それは、下を通る人々と視線を交わすこともできるような、マン





写真2 階段状のベンチの前にはガラスがはめられ、通りの様子を眺めることができ、通りからも彼らの様子を眺められる。Photo: Iwan Baan

ハッタンで唯一ハイラインだけで味わえる高所体験である<sup>11</sup>（写真2）。

### 「廃墟」としてのハイライン

ヨーロッパ造園史の中で「廃墟」といえば、イギリス風景庭園内に好んでつくられた「廃墟」が思い起こされるだろう。中世の人々にとっては、存在するのに見えていなかった古代遺跡の「廃墟」の「発見」は、古代が蘇ったルネッサンス期を経て、イギリスのグランド・ツアーの流行によって頂点を迎える。グランド・ツアーで発見されたイタリアの風景、そこに描かれていた「廃墟」への注目、そしてそれを実際の造園法に取り入れたイギリス風景庭園に深く関わっている。英文学者の川崎寿彦によると、風景に快い構成要素としての廃墟趣味が高まった時期は、1740年代、その時期に職業的な「廃墟設計士」が現れ、活躍したそう<sup>12</sup>。1710年代に流行

したグランド・ツアーによって、アルプスの「崇高美」が発見され、18世紀後半になると、再び新たな美の枠組み「ピクチャレスク」が登場し、今まで注意の払われることのなかった「風景」が新たな視点で発見され、それが造園の形をとってイギリス風景庭園が生まれた。その経緯を考えると、「風景」も「廃墟」も「発見」されて初めて人々の意識に上るようになったということが理解できる。川崎も指摘するように「廃墟をふりむき、みつめるのは、ある程度の知的・文化的レベルに達した大人たちだけ」ということになる<sup>13</sup>。

ハイラインも、そのような「知的・文化的」な人々に「発見」される前は「鉄道版の『ベトナム』」とネガティブに捉えられていた<sup>14</sup>。本来の役目を終え撤去されるべきなのに、それがダラダラと引き伸ばされていた閉塞状態への不快感を表した言葉だ。ニューヨーク市当局も民間デイベロップパーもハイラインをこのように見ていた。しかし、高架鉄道ハイラインが完成した1934年当時は、工業技術がなし得た驚異として賞賛される存在だった。その並外れた巨大な高架橋に加え、周囲の倉庫や工業ビルへ直接つながる様は目をみはるものだったという<sup>15</sup>。その後、マンハッタンの産業が金融、広告、出版産業に取って代われ、ウェストサイドの工業も衰退し、1982年にはハイラインも操業を停止して、開業当時は人を魅了した鉄橋の美しい造形も、「都市の古びた骨董品」になりさがっていた。

工業化時代の遺物としてのハイラインを新たなポスト工業化時代の中でいかに位置付け、価値を見出すか。そこには新たな「美」——つまり人を惹きつける力、ハモンドは「魔法」(magic)と呼んでいる——が必要だ。それが、大都市に残る原生自然だった。そして、18世紀イギリスで廃墟趣味、そしてピクチャレスクの美学を養ったものがイタリアの「風景画」であったように、ハイラインの「美」に人の目を向けさせたのは、前述したように、現代版「風景画」である「写真」芸術だった。そこには、写真家スターンフェルドの目を通した都会の原生自然が捉えられ、見るものを魔

法にかけたようにその風景に釘付けにした。

ハイラインは18世紀の風景庭園とは異なり、自然風公園の中に人工的に作られた廃墟ではなく、それ自体が廃墟であり、そこに原生自然が取り残された形で存在していた。同じく「廃墟」という言葉で表現されてはいるが、ハイラインは、工業化時代の遺物であり、それまでの「美」で語られる対象ではなかった。そういう意味で、同じ造園史の言語で語られるが、新しい時代、ポスト工業化時代の新たな「廃墟」なのである。

### ポスト工業化時代の新たな「廃墟」美

ハモンドは、ハイラインに「一目惚れ」した理由を、廃線から受けた「緊張」(tension)と表現している。緊張とは、「硬いものと柔らかいもの、野草と大きな広告看板、産業遺物と自然の景色、野草の花々とエンパイア・ステート・ビルが同時に見えること」から生じるもので、「それは醜くもあり、同時に美しくもある。その緊張がハイラインに力を与えている」と述べている<sup>16</sup>。それを「魔法」と呼び、その「魔法」を他の人と共有したいと運動を始め、それを再現することを景観設計に求めた。

写真家スターンフェルドが1999年から2000年にかけてハイライン上で撮った写真こそ、ハイラインの「緊張」を見事に捉えており、ハモンドもその事実を強調している<sup>17</sup>。彼の写真はハイラインに、隠れた原生自然のイメージを与え、前述したように、多くのニューヨーカーたちを魅了し、ハイライン保存運動を大きく前進させる役割を果たした。スターンフェルドの観察者としての感受性は、ハイラインの野草と廃墟の「発見」に留まらず、そこに「隠れた美」も見出している<sup>18</sup>。それが移ろう「光」と「色」だった。写真が捉えているのは、四季の移ろいとともに変化する植物たち、赤茶けた周りの工場のトーンと同調する秋の茶やオレンジ色の植物たちから、青々とした緑のメドゥへの移ろいは、見るものを別世界へと誘う<sup>19</sup>。

これこそ、ハイラインの魅力の本質——移ろいゆく四季の中に現れる植物の七変化——をなす「魔法」であった。

このような「廃墟」と「原生自然」の完全保存を望んでいた人たちもいたが（スターンフェルドもその一人）、実際の公園案では、それをそのまま手つかずに残す案や、一度取り除いてからそのまま戻す方法は採用されなかった。しかし、オウドルフの植栽デザインによってハイラインが本来もっていた「緊張」は見事に再現され、新たな「緊張」まで生まれたという<sup>20</sup>。というのも、出来上がったハイラインもまた矛盾するものの上に築かれたハイブリッド空間であったからだ。それは、工業構造物の上に作られたミュージアムであり、いくつもの近隣地区を走るコミュニティスペースであり、街路の上におら下がっている植物園であると表現されている。

このようなハイライン特有の「緊張」あるいは「矛盾」は、時代とともに移り変わる人や物に対しての「楽観的なヴィジョン」を体現しているという<sup>21</sup>。ハイラインはアメリカ重工業の記念碑であることは間違いなが、その特徴は存在の軽さ、「過去に根を張っているのに、『その（庭園の）ストーリー』は悪びれず、未来志向」であると述べられている。その楽観的ヴィジョンに貢献しているのが植物である。これは筆者が研究する19世紀の田園墓地にもいえることだが、本来重々しい雰囲気墓地が、生に満ち満ちた未来志向の場となっているのはそれが風景庭園にデザインされたからであった<sup>22</sup>。両者とも常に変化する植物が楽観的ヴィジョンの源となっている。ポスト工業化時代の「廃墟」は過去ではなく、未来に向かっている。

### ハイラインの背後にある「ナラティブ」

ハイラインをどのような体験の場としてデザインするか、それを具体化するのが「ナラティブ」である。それは、ハイラインの訪問者に空中庭園

を歩きながらどのような体験をさせるか、その台本ともいべきものだ。ナラティブは、ハイラインのデザインを担当したコーナーによって作られ、それを造園設計家のオウドルフが「翻訳」し植栽デザインに落とし込んでいった<sup>23</sup>。例えば、森のセクションにやってきてそこを抜けると明るい林間のメドウや草原（grassland）が広がっているというようなストーリー展開だ。ナラティブは歩みとともに変化していく。

このようにナラティブからデザインを起こすことは、デザインだけで単発的に植物を植えるより、景観に時間的・空間的広がりや深みを与え、ノスタルジックな感傷さえ引き起こさせている。例えば、前述の草原を意味する“meadow”という英語だが（本論では「メドウ」と表記）、英語の中でもっとも美しい言葉の一つだと文学者マーク・ピーターセンが述べているように<sup>24</sup>、西欧文化、特にアングロ・サクソン文化の中で、ある種郷愁、理想郷を想起させるような風景だ。それは、森を抜けてぱっと広がる明るい林間地であり、草原が広がり、小川さえ流れている。そこで目にするのは、水を飲む「バンビ」だ<sup>25</sup>。興味深いことに、先に紹介した、ハイラインを「狭く深い都市の谷」に見立てた建築評論家ウルソフは、コーナーの設計を念頭におきながら、ミツバチや蝶や鳥が飛び交うハイラインになんと「バンビ」の幻影すら見ている。植栽デザインに物語を与えるナラティブの効果たるや絶大である。とはいえ、ウルソフは、あちこちにあるかつての鉄道の痕跡がノスタルジア効果を生んでいることには間違いないが、それが単なる感傷の場に成り下がっていないのは、過去の痕跡も取り込んで融合させた洗練されたデザインにあることを指摘することも忘れていない<sup>26</sup>。

## ハイラインは道である

ナラティブを体験する場は道であるが、道が提供するのとは静止した「場」

というよりは、「歩く」という時間的経過によって展開するキネマティックな体験である。一連の驚きに満ちたエピソードを歩き抜けること、このコレオグラフィー（振り付け）と体験こそがこのプロジェクトの最もエキサイティングでオリジナルなところである。

ハイラインには、ヴィスタ（通景）もヴァンテージ・ポイント（見晴らし）もあり、道はゆっくり曲がりながら進み、それによって景色が変わり、10番街を見ていたと思ったら、方向が変わって自由の女神が見えたりする。そこが楽しいところだとコーナーは説明する。これはイギリス風景庭園の道が担う役割と変わらない。といっても、ハイラインは帯状の緑道、つまり道だけの存在であるが、その機能はイギリス風景庭園の文脈の中に存在することは間違いない。

アメリカにおいてイギリス風景庭園は、まず墓地に適用され、効率や合理性を追求する都市のアンチテーゼとなるような精神空間として位置付けされたことは、他の論文ですでに指摘した<sup>27</sup>。その系譜上にセントラル・パークが位置するのだが、その論文で論じた道の役割が、庭園から切り離された道のハイラインにも当てはまる。愛でべき周りの風景は、もはや自然の中の森や池や川ではなく、エンパイア・ステート・ビルや自由の女神、都会のハドソン川である。

かつてニューヨークには、街中をそぞろ歩く遊歩、プロムナードの習慣があった。19世紀に流行し、午後遅くになると、ニューヨーカーたちは、着飾ってブロードウェイやバッテリー通り、五番街などに繰り出した<sup>28</sup>。遊歩の習慣も時代の移り変わりとともに衰退するが、ハイラインは失われた都市の儀式を再び取り戻す場としても期待された<sup>29</sup>。

## ハイラインでの植物と人との関係

19世紀の田園墓地では、訪問者はイギリス風景庭園に設計された墓園の

道を歩きながら、季節で変化する園内の植物を眺め、冬がくれば植物は枯れるが、春になると再び芽生えるその姿に、人生も無意味な死で終わるのではなく復活がまっていることを学ぶ教訓の庭であった<sup>30</sup>。ハイラインにおいても、そのような植物と人間との関係を見ることができる。造園では枯れた植物は基本的に取り除かれるが、オウドルフの造園哲学では、その枯れた姿に美を見出して、四季とともに移ろう植物のライフサイクルを生かすアプローチに変化させているからだ。オウドルフの植栽コンセプトの核心にあるものは、植物を「人間の誕生、生、死のメタファー」とみる見方だ<sup>31</sup>。人間が一生かかって体験するものを植物は1年で体験する。植物のライフサイクルと人間の一生とを関連づけたい、というのも、庭づくりは人生の小宇宙と考えるからだと言っている。

しかし、ハイラインはさらに先を行っている。19世紀の田園墓地では、死者をピクチャレスクな美しい景観の中に埋葬することによってそれまで無視されてきた死者に敬意を払ったが、現代のハイラインでは、植物の「死」、つまり枯れた姿にさえ敬意を払い、美を見出して評価するからだ。オウドルフは、植物の「死」(decay)を他のどの造園家よりも高く評価すると述べている<sup>32</sup>。とはいえ、植物のライフサイクルを完全に自然に任せるワイルド・ガーデニングの影響は認めつつも、完全放任主義とは袖を分かつよう、人間の手を加える「秩序」は重んじながらワイルドな雰囲気を作りあげるのがオウドルフ流である<sup>33</sup>。

### ハイラインは現代版多機能空間 ——ミュージアムであり植物園でもある

アメリカの都市公園の先駆けとしての田園墓地を研究した時に、田園墓地が墓地改革運動として成功した要因として、それが時代の文化的ニーズを巧みに取り入れた多機能空間であったことを指摘した。田園墓地は、社会的エリートたちが園芸に大きな関心を寄せていた時代、園芸協会との共

同事業として設立され、植物に名札をつけた最初の「植物園」であり、美しい景観と記念碑の彫刻から成る「ミュージアム」でもあった。それから200年近く経った21世紀のハイラインでも同じ用語が使われ語られていることは興味深い。前述したように、ハモンドの言葉によると、ハイラインは、「工業構造物の上に作られたミュージアム」であり「市の通りの上に吊り下がっている植物園」であるという<sup>34</sup>。

墓地も空中庭園も、万物流転の世の中で「過去」を留め、記念する「ミュージアム」の働きをしていることは確かだ。しかし、コンクリートのビルが林立する大都市では、田園墓地でも指摘したように、ビルが墓石に見え、都市自体が命を失った「墓地」になるというイメージの逆転が起こる<sup>35</sup>。単なる工業化時代の静止した遺物を都市に残すだけではダイナミズムが生まれない。そこで、「植物」の役割が重要になる。ある意味、静止した無機質な都市空間のなかにおいて、植物が変化をもたらしている。しかも、その変化はデザインによって以前よりもダイナミックになっている。かつての野草が生い茂るハイラインは、四季を通じて徐々に植物が変化していたが、再生されたハイラインでは植物は週ごとに変化する<sup>36</sup>。ネイティブプランツに加え、新たに導入された植物や乾燥に強い宿根草などが以前にも増していっそうワイルドに茂っているからだ。

都市の中であって植物が示す絶え間ない変化は、「美」と「死」(decay)の間に緊張を生じさせ、これがニューヨークを動かしているエネルギーに似ているとハモンドは指摘する<sup>37</sup>。このようなコントラストとそこから生じる緊張感こそが、都市に隠された「秘密」の園には必要で、それによってハイラインは美しいが、それが「郊外」の美にならず「都会」の美としてとどまっていられる理由であると述べている。

「植物園」としてのハイラインも、既存の面白みのない(sterile)植物園とは異なるという<sup>38</sup>。植物園が、多機能空間の田園墓地兼植物園から分化した段階で、歩く人の振る舞いが単一化され、面白味が減じたからであ



ろう。ハイラインでは、ブロックごと、ヴィスタごとに身体の動きがスクリプト化されて<sup>39</sup>、歩く人を大きな物語に「参加」させるという方法で、感情と知性に訴えかけ、「白昼夢」を取り戻している。

## おわりに

筆者がマンハッタンに一年滞在して分かったことは、ニューヨークを魅力的にしているアートやパフォーマンスは、人が参加することによって完成される「参加型」が多いということだ。即興パフォーマンス集団、“Improve Everywhere”などその典型だ。ニューヨークという街は、人が参加することによって様々なことが起こっている。ハイラインを歩く人も、高見から路上を眺める観察者であると同時に、路上からは、彼ら自身が額縁にはめ込まれたパーフォーマーになっている（写真2）。設計者のコーナーは、それを「シンプルな都市ドラマのミニシアター」と呼んだ<sup>40</sup>。

その点で、ハイラインはセントラル・パークのように「街から逃げるのではなく、その中に浸る」<sup>41</sup>場といえる。日常にどっぷり浸るハイラインは、すでに目新しさを失った都市に再度目を凝らして、フレッシュな視線で見つめ直す「発見」の装置と考えられる。フレーム越しに通りをみれば、赤、青、黄色に点滅する信号や、車の流れが、暖炉の火を見つめているように、意識を遠ざけ、催眠術のように、想像の世界に誘う<sup>42</sup>。まさに、「シンプルな都市ドラマのミニシアター」が繰り返されている。通りから上を見ると、自分たちを見る観客がいることに驚く。観客もまた見られている。皆、「オンステージ」それがニューヨークであり、ハイラインである。

## 注

- 1 “High Line Magazine: B1G DA+A and Parks” by Adam Ganser, January 18, 2017より。[<http://www.thehighline.org/blog/2017/01/10/high-line-magazine-b1g-da-a-and>

- parks] (2018. 8. 27)
- 2 例えば、木村優介他「ニューヨーク・ハイラインにおける歴史的高架橋再利用案の形成過程」、『都市計画論文集』（日本都市計画学会，No. 45-3，2010年10月）は、高架橋という複雑な利害を有する社会基盤施設に対して、なぜ一営利団体が実現可能な再利用案を作成でき、計画主体として意思決定者に認められたのかその経緯を明らかにしている。
  - 3 飯島健太郎「ニューヨーク・ハイライン誕生の系譜と植栽の特徴」、『芝草研究』46（1），2017年。
  - 4 ジョシュア・デイヴィッド，ロバート・ハモンド著，和田美樹訳『HIGH LINE アート，市民，ボランティアが立ち上がるニューヨーク流都市再生の物語』，アメリカンブック&シネマ，2013年，p. 14.
  - 5 Joel Sternfeld, *Walking the High Line* (Gottingen, Germany: Steidl) 2012, pp. 31-45.
  - 6 “154MC: Walking the High Line by Joel Sternfeld—An Extended Critical Reflection,” Charlotte Pattinson Photography のブログ。[<https://charlottepattinson.wordpress.com/2015/04/13/walking-the-high-line-by-joel-sternfeld-anextended-critical-reflection/>] (2018.8.31)
  - 7 Ibid.
  - 8 デイヴィッド他，op. cit., p. 35.
  - 9 Nicolai Ouroussoff, “On High, a Fresh Outlook,” *The New York Times*, June 9, 2009.
  - 10 Adam Gopnik, “A Walk on the High Line: The Allure of a Derelict Railroad Track in Spring.” *The New Yorker*, May 21, 2001.
  - 11 Ouroussoff, op. cit.
  - 12 川崎寿彦『楽園のイングランド—パラダイスのパラダイム—』河出書房新書，1991年，p. 74.
  - 13 Ibid., 70.
  - 14 Thomas J. Lueck, “Up, But Not Running, on the West Wide,” *The New York Times*, July 25, 1999.
  - 15 Ibid.
  - 16 Oudolf, et. al., op. cit., p. 11
  - 17 Ibid., p. 12
  - 18 “154MC: Walking the High Line by Joel Sternfeld—An Extended Critical Reflection,” op. cit.
  - 19 Ibid.
  - 20 Oudolf, et. al., op. cit., p. 13
  - 21 Ibid. p. 17
  - 22 黒沢眞里子『アメリカ田園墓地の研究—生と死の景観論』玉川大学出版部，2000年，p. 192

- 23 Jared Green, “Piet Oudolf, Leader of the New Perennial.” 05/11/2010 [<https://dirt.asia.org/2010/05/11/piet-oudolf-leader-of-the-new-perennials/>] (2018.9.23)
- 24 マーク・ピーターセン 『続日本人の英語』 岩波新書, 1999年, pp. 89–90
- 25 Ibid.
- 26 Ouroussoff, op. cit.
- 27 黒沢真里子 「19世紀アメリカにおける『田園墓地』運動—アメリカの『聖地』創造」, 『アメリカ研究』 第32号, 1998年6月
- 28 Roy Rosenzeig, Elizabeth Blackmar, *The Park and the People: History of Central Park* (NY: Henry Holt and Company, 1992), p. 27
- 29 Ouroussoff, op. cit.
- 30 黒沢, 2000年, p. 191
- 31 Green, op. cit.
- 32 “Piet Oudolf on The High Line and restoring prairies: The New Perennial Movement cultivator and discerning gallerist’s go to gardener talks us through his life and times.” PHAIDON, 2014/11/08. [<https://uk.phaidon.com/agenda/design/articles/2014/november/08/piet-oudolf-on-the-high-line-and-restoring-prairies/>] (2018. 9. 23)
- 33 Ibid.
- 34 Oudolf, et. al., op. cit., p. 13
- 35 黒沢, 2000年, p. 193 都市は, ダイナミズムの欠けた都市のイメージで語られ, そこに命を吹き込む植物が添えられることが多い。
- 36 Oudolf, et. al., op. cit.
- 37 Ibid., p. 14
- 38 Oudolf, et. al., op. cit.
- 39 James Corner Field Operations, op. cit., p. 190
- 40 Ibid., p. 191
- 41 Oudolf, et. al., op. cit., p. 13
- 42 James Corner Field Operations, op. cit., p. 191